

(大雪対策 第3報)

雪害及び融雪遅延に対応した農作物管理について

気象災害対策
平成30年2月27日
中央普及支援センター

本年、2月4日～7日にかけての大雪により農業用施設等に多大な被害が発生し、現在も加賀南部を中心に、ほ場に積雪があり、融雪時期が遅れることが予想されます。

今後の農作物の管理にあたっては下記に留意して下さい。

1 麦類

(1) 排水溝の点検

速やかな排水を促すため、圃場巡回を実施し、排水溝の点検を行う。必要に応じて、排水溝の手直しや追加して設置を行う。

(2) 融雪促進

2月末にほ場に30～40cm以上の積雪がある場合は、融雪剤を散布する。

○融雪資材及び散布量：くん炭 10～15kg/10a、ようりん 40～60kg/10a

(山形県雪害及び融雪遅延に対応した農作物管理から抜粋)

(3) 消雪期追肥

①施用時期

・消雪後、平均気温4～5℃を確認次第、速やかに実施する。

→平年の施用時期は2月下旬～3月上旬であり、本年も同時期に施用すること

②施用量

(大麦一発肥料の場合)

・消雪期の茎数が700本/m²以下の場合、窒素量で2kg/10aを目安に施用する。

(分施体系の場合)

・窒素量で3～4kg/10aを目安に施用する。

※茎数が800本/m²以上の場合、窒素量3kg/10aとする。

(4) 伸長期追肥

(大麦一発肥料の場合)

LPS30の溶出が続くため、茎数が多い圃場では出穂前25～30日の伸長期追肥は原則不要である。ただし、茎数が極端に少なく(茎数400本/m²以下)、葉色板値3.5以下の場合には下記を参考に施肥を行うこと。

幼穂長7mmを確認し、10a当たり成分で窒素量1～2kg施用する。
この時期は節間伸長始期にあたるため、過剰な施用は下位節間を伸ばし、倒伏につながる恐れがあるので注意する。

(分施体系の場合)

茎数が400本/m²以下の場合、窒素量で3kg/10aを目安に施用する。

(5) 止葉展開期追肥

(大麦一発肥料の場合)

茎数が少なく(500本/m²以下)、葉色が薄い(葉色板値5未満)場合は、出穂10日前(葉耳間長±0cm)までに、窒素量1kg/10aを上限とし施用する。

→葉色が濃く(葉色板値5以上)、生育量が過剰(茎数550本/m²以上)な場合は、施用しない

(分施体系の場合)

- ・葉色が濃く(葉色板値5以上)、生育過剰(茎数550本/m²以上) 窒素量0kg/10a
- ・生育適正 窒素量2kg/10a
- ・葉色が淡く(葉色板値5以下)、生育不足(茎数400本/m²以上) 窒素量3kg/10a

◎麦茶用麦は出穂10日前までに窒素量3kg/10aを必ず施用すること

2 野菜・花き

(1) 施設栽培

①育苗管理(すいか、トマト、キュウリ等)

- ・育苗施設の被覆資材の破損箇所は、速やかに補修する。やむを得ず補修が間に合わない施設(ガラス温室等)で育苗する場合は、トンネルを2重にする等夜間の保温に努める。
- ・育苗中は、各ステージでの適温管理に努めるとともに、過湿による病害発生を防ぐため、晴天時にはトンネルを開けて換気し、健苗育成に努める。
- ・定植時期が予定より遅れることが予想される場合は、苗の老化を軽減するため、順化や定植前に液肥を施用し、葉の黄化を防ぐ。

②定植、定植後の管理(すいか、トマト、キュウリ等)

- ・マルチの展張は早めに行い、定植時までに地温が上がるようにしておく。
- ・定植前の植え穴かん水は、定植2～3日前までに行い、定植時の地温を確保する。
- ・定植後は、気象条件に応じて保温資材を活用し、活着促進を図るとともに、凍害や低温障害を防止する。
- ・老化苗は吸肥力が低いため、追肥の量や回数を増やして草勢の回復に努める。

③収穫中の品目の管理(エアリーフローラ、ストック等)

- ・晴天日にハウスを閉め切ると、ハウス内温度や湿度が急激に上昇し、病気の発生や軟弱な生育となるため、ハウスの換気に努める。

(2) 露地栽培

①育苗管理(ブロッコリー等)

- ・今後育苗を開始する品目は、消雪の予想日から推定される定植日を推計して播種期を決める。
- ・ブロッコリーでは、苗が老化すると、定植後の植え傷みや生育の遅れにより、ボトニング(早期出蕾)を招きやすいため育苗期の温度管理に注意する。

②定植ほ場の準備(ブロッコリー、ダイコン等)

- ・積極的にくん炭等の融雪剤を散布するなどし早期の融雪に努めるとともに、融雪水が停滞しないよう排水溝を設置し速やかな排水を促す。

※融雪剤の散布については麦類に準ずる

③生育中の品目の管理（玉ねぎ等）

- ・雪の下の温度は安定しているため、凍結を防ぐため、融雪剤の散布はせず、自然に消雪するのを待つ。
- ・融雪水が停滞しないよう排水溝を設置し、速やかな排水を促す。
- ・玉ねぎは、消雪後、畝に停滞水が無くなった後、速やかに追肥を行う。

3 果樹

(1) 融雪促進対策

積雪により、地域によってはせん定作業が大幅に遅れている。また、ぶどう施設の被覆作業も遅れることが予想されることから、積極的に融雪剤を散布するなどし、排水対策と併せて融雪を促進する。

※融雪剤の散布については麦類に準ずる

(2) 樹体被害対策

雪害による枝折れ被害が大きいほど、収量が減るだけでなく生育期の樹勢が強くなりすぎる傾向にある。このため、枝折れは可能な限り修復することが望ましく、枝の皮部の1/2～1/3が完全に繋がっていれば、速やかに回復措置を実施する。

- ①主枝裂開部はナイフで削り取りボルト締め、あるいはカスガイ打ちするとともに、傷口に水が入らないよう肥料袋等で接合部を覆って癒合を図る。癒合するまでは、支柱などで支持補強する。
- ②被害が大きく修復が困難な枝は切り落とし、切り口に殺菌癒合剤を塗布する。枝が基部から欠損した場合も傷口を平らに削った後、殺菌塗布剤を塗布して枯れ込みを防ぐ。
- ③裂開した枝では、側枝や結果枝の数を減らして着果負担を軽くする。一方、大枝が折れ切り落としした場合は、樹勢が強くなりすぎる恐れがあるので、残った枝のせん定を弱めにするなど配慮する。

(3) 野ウサギ、野ネズミ食害防止対策

- ①融雪が遅れると野ネズミの被害が助長されるので、融雪を促進するとともに、殺そ剤の散布などの被害対策を講じる。
- ②野ウサギでは防兎ネットで園全体を囲ったり、餌となる剪定枝を園の外周に積み、園内での食害を少なくする。

4 畜産

(1) 施設の融雪水対策

融雪水が畜舎や飼料庫、家畜ふん尿処理施設等の施設内に入らないように、排水路の確保等に努める。特に、家畜ふん尿処理施設内等に融雪水が入ると、家畜ふん尿が施設外に流出するおそれがあることに留意する。

(2) 飼料作物の融雪対策等

牧草の雪腐病は、積雪期間が長いほど被害が大きくなるので、昨秋播種した牧草地やイタリアンライグラスの牧草地では、必要に応じて融雪促進剤を散布するとともに、融雪水が停滞しやすいほ場では、適切な排水対策に努める。

また、一番草の収量確保のため、融雪後にできるだけ早く追肥を行うなど、適切な肥培管理に努める。